3 伝統音楽・芸能の場の広がり ——インドネシアを例に

1 ガムランは進化する伝統音楽

インドネシアのガムラン音楽（地域により様々なスタイルがありますが，ここでは中部ジャワの王宮で発達したガムランについて述べます）は，伝統音楽でありながら常に進化しています。これは，楽譜を重んじる西洋のクラシック音楽，あるいは師匠から弟子へ，徹底した伝統の継承を重視する日本の音楽とは，大きく異なる点ではないでしょうか。

そもそもガムランの古典曲は，いつも同じように演奏されるわけではなく，同じ曲でもジャズのように演奏されるたびに違った曲調になります。それは，ガムランの古典曲は作曲者が不明であること，あるいは楽譜によって固定されていないことにもよるでしょう。ガムランは元々口承により受け継がれてきた音楽ですが，20 世紀前後に記録や教育のために楽譜が記されるようになりました。しかし，すべてのパートの奏法を記したスコアではなく，大事な骨組みの旋律「バルンガン」が記されたメモ書きのようなものでしかありません。その「バルンガン」を繰り返して演奏するのですが，繰り返しの回数やテンポ，強弱，アレンジ等は，すべて演奏者に委ねられています。その場の TPO に応じて，たとえば結婚式なら祝いの席にふさわしい賑やかな雰囲気で，という具合にその場で曲調が決められるのです。演奏者や演奏目的，また地域や時代によってもアレンジの仕方は変わるので，同じ曲でもまるで違う曲のように聞こえることさえあります。そこに斬新なアレンジが施されれば，古典曲を元にした新作のような作品にもなり得るのです。

そのような理由で，ガムラン音楽には「伝統」と「現在」が常に同居しています。古典の中に，「今」を意識した新しい要素が入り込み，ガムランの伝統は日々進化を続けているのです。

写真①　王宮のガムラン演奏風景（筆者撮影）

2 時代とともに変わる演奏目的

そのような特色を持つ音楽なので，ガムランは時代の影響を大きく受けます。まず演奏目的そのものが，時代と共に変化しています。古来ガムランは，神聖な儀式において神や精霊など目に見えぬもののために演奏されてきました。村のお清め，お祓い，雨よけ，雨乞い，病気治癒等，人々の祈りが込められた演奏でした。もちろん，そのような目的の演奏は現在でも行われています。ガムランが鳴らされる本来の在り方とも言えるでしょう。

王宮が権力を握っていた時代には，宮廷で行われる様々な儀式に伴い，ガムランや舞踊は欠かせない存在でした。王の権力を誇示するためにも，盛大な式典と共にガムランが演奏されたのです。戦後になると，ガムランは徐々に王宮の外に広がり，一般庶民も楽しめるようになりました。まずは RRI（Radio Republik Indonesia）と呼ばれる国営ラジオ局の専属楽団の名演が，電波に乗って街中に流れたほか，カセットテープにも録音され，市中に出回りました。また，芸術高校や大学が創立され，ガムランが学校で指導され，理論的な研究も行われるようになりました。これまで宮廷

内，または音楽家の家系において口承で伝えられてきたガムランが，楽譜を利用したわかりやすい教育により，ガムランに縁の無い一般人でも学べるようになったのです。

一方，ガムラン伴奏を伴う伝統芸能，影絵芝居ワヤンは，現代においても大勢の客を集める人気の芸能ですが，近年は大衆受けを狙うために演出が派手になっています。ガムラン演奏以外にポップス系のバンドを入れたりミラーボールが回ったりして，物語やガムランの知識が無くても容易に楽しめるような刺激的な演出が好まれるようになりました。逆にその傾向を憂い，古典回帰を目指す人形遣いもいるようです。

このようにして，ガムランを取り巻く様相は刻々と移ろいでいます。かつてはクルネガンと呼ばれる，祝いの席などでゆったりとした古典曲を深夜まで聴かせる会があちこちで開かれていましたが，現在そのような演奏会は極端に減ってしまいました。それに代わり，たとえばジャワ・ガムランの中心地の一つである古都ソロ（スラカルタ）で最近目立つのは，大きな野外ステージで開催されるガムラン・フェスティバルです。かつてのジャワ文化へのノスタルジーの表れか，大都市ではガムランにちなむイベントがお金をかけて盛大に行われるようになり，ガムラン演奏家はそこでも能力を発揮するようになったのです（Supanggah 2000）。いくつかの例をご紹介しましょう。

3 ガムラン・フェスティバル

2018年8月9日～16日にソロで行われたインターナショナル・ガムラン・フェスティバル（IGF2018）は壮大なイベントでした。アメリカ，イギリス，オランダ，オーストラリア，タイ，シンガポール，日本など世界各国のガムラングループが一堂に会し，一週間に渡って各地で演奏会を繰り広げたほか，基調講演やパネル・ディスカッションなど様々な催しが行われました。イベントのテーマは「ホーム・カミング」。世界に広まったガムランがソロに里帰りするという意味が込められたのです。海外だけでなく，インドネシア各地域のグループや各所の王家のガムランも所有楽器を携えて集まり同じステージで演奏するなど，見ごたえのある内容でした。

写真② IGF2018出演のイギリス人グループ（筆者撮影）

国内・海外を問わず内容的に目立ったのは，このイベントのためにアレンジしたり，異ジャンルの楽器と組み合わせたり，視覚的な要素も取り混ぜたりして新しい作品を披露するというものでした。筆者も参加した日本のグループ・ランバンサリは，「里帰り」という趣旨を重んじて，普段上演する機会の多い王宮スタイルの伝統舞踊を故郷への感謝の意を込めて披露したのですが，そのように古典をそのまま演奏するグループは多くはありませんでした。新作が多かったのは，繊細でゆったりとした古典曲は，野外の大舞台には適さないという理由もあったかもしれません。しかし，それよりも「ガムラン」という名の音楽が，もはや伝統的なものだけではなく，新しいアレンジやコラボ，様々な地方色やお国柄まですべてを内包したものとして広く受け止められていたからではないか，との印象を受けました。

このように，古都ソロにおいて一般市民が気軽にガムランに触れる機会といえば，もはや古典曲を聴かせる伝統的なスタイルの演奏会よりも，大衆向けのワヤンや，派手なフェスティバルに移行してしまったように見えます。それらの場で演奏されるガムランの多くは，古来からの長大でゆったりとした古典曲ではなく，太鼓等が激しいリズ

ムを刻み，様々なパフォーマンスと共に大音量で鳴らされる新作であることが多いのです。それゆえ，どの曲も似たような，派手で単調な音楽になってしまう傾向が見られます。

4 フェスティバルの新動向

そのような中，2019 年夏にソロで見たフェスティバルは興味深いものでした。ステージ映えする演出はあったものの，テーマ性を重視した作品が多かったのです。たとえば，ソロ以外の地方色豊かなガムランの演奏スタイルをメドレー形式でつなぎ，まるで音楽でインドネシア一周の旅をしているかのような作品，グンデル（共鳴筒付き鍵盤楽器）奏者である母への畏敬の念を表した息子の作品，ガムランの楽器名を歌詞に織り込み，ユーモラスにガムランの楽しさを振り付けと共に表現した作品など，どれも曲に込められた思いが伝わってきて，飽きることがありませんでした。

現在，ソロでは新しいイベントが開催されるたびに新たな作品が創作されています。そのためか，現在のガムラン奏者や舞踊家は，作曲家，振付師，演出家であることも求められます。たとえば，芸術大学 ISI（Institut Seni Indonesia）Solo の先生方は，しばしば新作の発表を求められます。新作と言ってもその内容は様々で，古典曲そのままのような従来の手法で創られた作品があれば，手作りの楽器で斬新な音世界を創り上げている作品もあります。そのようにして，現地のガムラン界ではかなり活発に新作が発表されているのです。ISI Solo の元学長で前述のインターナショナル・ガムラン・フェスティバルのディレクターも務めた故スパンガ氏は，「ガムランが生き残るためには，時代と共に常に変化し発展していく社会の好み，必要性に沿っていかなければならない」と述べています（Supanggah 2000）。ガムラン演奏の目的が時代と共に移り変わり，現在では観客に喜ばれることが一つの大きな目的となっているのです。観客の好みを反映させるあまりに古典の深い味わいが削がれることを憂う人も当然いるでしょう。しかし，伝統音楽が生き残っていくためには，実験的な試行錯誤も含め，変化を恐れないことが大切なのかもしれません。では，世界に広がったガムランは，海外ではどのような展開を見せているのでしょうか？

5 世界に広がるガムラン ～日本を例に～

インドネシアで進化を続けるガムランは 100 年以上の時を経て，今や海外の多くの国の教育期間で研究，指導，演奏されるまでになりました。もっとも盛んな国はアメリカやイギリス，日本などであり，アメリカでは 200 を超えるガムランセットがあると言われています（トゥリヨノ 2004）。オーケストラ以外に，これほどまで世界中に拡散した合奏音楽はあるでしょうか？ 大掛かりな楽器セットを現地から輸入して大人数で演奏するという，軽量化や効率化を好む現代の風潮とは逆行している音楽であるにも関わらず…。しかも，平均律とはまったく異なる音律・音階であり，特に世界的に有名な曲があるわけでもありません。それでもガムランがこれだけ世界に広まったのは，一つには従来の音楽には無い新たな可能性をガムランに見出した人が多かったからではないでしょうか。たとえば，初心者もベテランも一緒に混じって合奏できる，楽譜が読めなくても音でコミュニケーションを取り，互いに助け合いながら演奏できる，そんなところが新しい音楽の価値観として受け入れられたのかもしれません。

ところで，海外，とりわけ日本でガムラン公演を行うにあたり，現地と大きく異なるのは，公演の多くが有料であるという点でしょう。インドネシアでは，元々ガムラン演奏は結婚式や独立記念日等の儀式やイベントのために行われるもので，経費や謝礼等の一切は主催者が支払い，観客は無料で観覧します。その体制は，フェスティバルが全盛となっている現在でも基本的には変わっていません。そのせいか，観客同志が本番中におしゃべりをしていることも普通で，会場全体が和やか

な雰囲気に包まれます。しかし，日本で観客が無料で観覧できるのは，市民のイベントや祭りなどごくわずかな場に限られ，通常はホールでの有料公演となります。演奏者も観客もやや緊張した雰囲気の中，見知らぬ音楽が演奏されるわけです。元々ガムランは静かにじっくりと鑑賞するタイプの音楽ではないため，シーンとした会場では，一般の観客は次第に飽きて眠くなってしまいがちです。できればリラックスしながら，いかに珍しい音楽に興味を持っていただくか？　企画や選曲等に工夫が必要でしょう。

そこで最後に，ガムラン音楽の紹介の仕方として面白いと感じた，ごく最近の例を紹介しましょう。筆者が勤務する大学の学生，卒業生，講師陣からなるグループ，東京音楽大学ジャワ・ガムランオーケストラが出演した「ガムラン×星空〜きらめく響き〜」（和光大学ポプリホール鶴川）です。2021 年 8 月 24 日，町田市がオリンピックにおけるインドネシアのホストタウンであることにちなみ開催されたのですが，その企画が斬新でした。ステージ後方に星空の映像を投影し，日本とインドネシアの星の見え方の違いや星座にまつわる話などと，円を描く星空のようにメロディーが繰り返されるガムランの音楽的特徴の話などをからめながら，天体の美しい映像を眺めつつガムラン演奏を聴くという趣向でした。ガムランには本来歌のある曲が多いのですが，この日はコロナ禍ということもあり，あえて歌無しのインストゥルメンタルで演奏しました。硬質な金属音のみの響きはかえって星空の映像と上手くマッチしたのです。最後には，日伊共同で新たな天文台が建設されるという話に続き，当大学院生によるガムランとピアノのための新作「Satellite」を初演しました。星空の美しいビジュアル映像を介したガムラン音楽へのいざない，視覚と聴覚の両方で楽しめ，日本とインドネシアの文化の違いや共通点が浮き彫りとなり，お客様からも好評でした。

写真③ 「ガムラン×星空」リハーサル風景　　（撮影：渡邉亮介）

これからも，私たちは祖国インドネシアを離れたガムランの，次の進化の道を探らなければなりません。そのためには見せ方を工夫する，新たなアレンジや新作を披露するなど様々な方法が考えられるでしょう。しかし，ガムラン音楽の根幹の部分，たとえば純粋な合奏の楽しさ，音楽を共有する場の大切さ，そして演奏という行為が人々の願いや祈りの気持ちにも通じるということを忘れてはなりません。その上で故郷を飛び出したガムランが，各国でどのように進化していくのか？私たちは今まさに問いかけられているのです。

【参考文献】

Supanggah, Rahayu.
2009 Bothekan Karawitan Ⅱ GARAP. ISI Press Surakarta 2009. P.223-224
トゥリヨノ，ブラマンティヨ.
2004 都市文化の活力ー関西地域におけるジャワガムラングループの実態ー．林捻子訳．都市文化研究 3 号．p.207-218
16bramantyo.pdf（osaka-cu.ac.jp）
アクセス日：2021 年 8 月 20 日

（木村佳代）